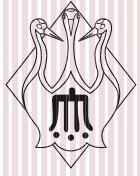


花時計



vol. 45

2024 March

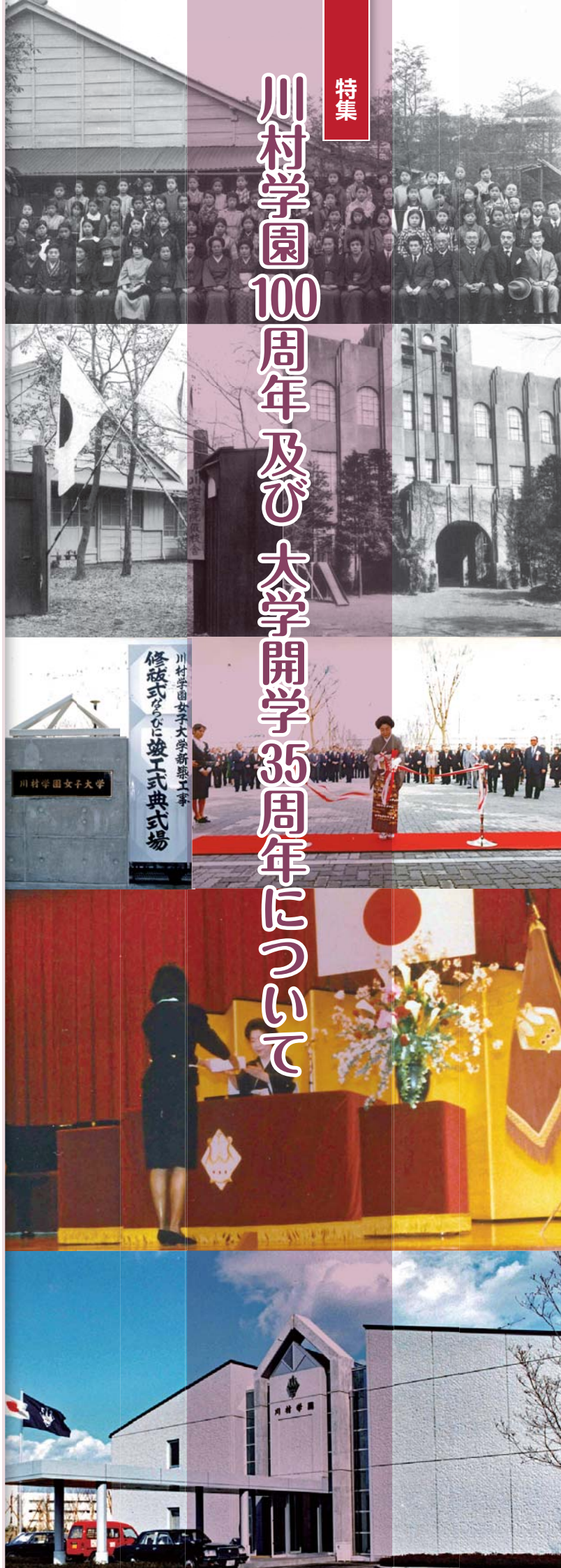
- 学科&大学院の Topics of the year
- 教員エッセイ
- 新任教員紹介
- 退職教員
- 行事報告
- BOOKS 新刊紹介
- 心理相談センターの活動

川村学園女子大学

我孫子キャンパス / 目白キャンパス

特集

川村学園100周年及び
大学開学35周年について



特集

川村学園100周年 及び 大学開学35周年について

自覚ある女性をはぐくんで

学長 西川 誠

令和6(2024)年度、川村学園は100周年を迎え、大学は35周年となります。川村学園は、川村文子が、関東大震災後の復興には女性の活躍が必要であると考へて、感謝のこころを持った、女性の自覚を考へ、社会に奉仕する女性の育成のために、川村女学院を創設したことに始まります。川村文子の子女一貫教育の希望は、存命中には幼稚園から短期大学まで完成し、そして第4代学園長川村澄子の時代に大学の開学となりました。

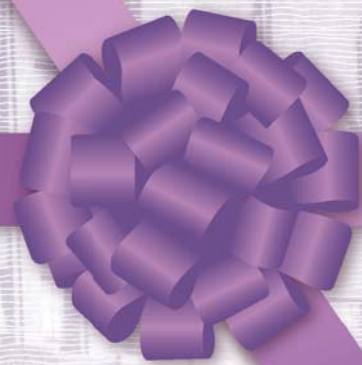
和辻哲郎は『風土』で、人間は風土に規定される存在と考察しました。和辻ほど大きく捉えなくても、大学の環境は学生のカラーに影響を与えていると考へています。現在キャンパスは2つありますが、我孫子キャンパスを取り上げましょう。私が着任前に我孫子キャンパスを訪れたときに思ったのは、実に空が遠い場所だということでした。青く広がっていく。副学長になって以降はいろいろなお客様を案内しましたが、広々として実に大学らしいキャンパスだという感想をいただいています。女子中心の広々としたキャンパスで、自分を解放して自己肯定感を高める。そして学修と学生生活を通じて、自分の夢に向かってゆっくりと成長していく。そういう学生が35年の間に育ちました。目白キャンパスも閑静な場所という点では共通する部分があると思います。屋上に出れば、周りに高い建物はそれほどなく、視線は広がっていきます。キャンパスの

環境が川女生(かわじょせい)のカラーとなっていると思います。

在学生の皆さんは、この環境の中で、自分の落ち着くことができる場所を探してください。そこは、皆さんが自覚ある女性となるトパスであり、将来大学を思い起こす縁(よすが)になるはずです。私にはそこはどこだろう。桜並木から庭園に入る小川の辺りでしょうか。

感謝のこころを持って自己実現を目指す女性に成長して欲しいという川村文子の教育理念は、女子の大学であること、我孫子は静かな緑多く広がる空間・目白は都会の中の閑寂な空間であることという環境の中で実現されて来ました。多様性を認める社会ではありますが、文子の理念の根幹は大切にしていきたいと考へています。





同窓会から見た学園100年の景色

元川村学園女子大学学長 熊谷 園子

学園100周年を迎え、大学もあつという間に35年を迎えました。

この100年と35年の背後には在学中の教育推進の他に、学窓を離れてから家庭や社会で活躍するリアルな卒業生の存在があります。同窓会も100年近い歴史を刻んで来たことになります。私は今から10年ほど前、教員として大学で働く傍ら、卒業生として川村学園同窓会に関わるようになりました。初めて活動に加わるようになって本当に驚いたのは、かくも多くの方達がボランティアで同窓会活動を担っている事実でした。学園愛を持って自発的に参加している卒業生の存在に感銘を受けました。現在の本部役員の最年長は87歳です。学園は教育を施す傍らで生徒・学生のところに学園愛を育んで来たのです。

同窓会会則には、「本会は川村学園創業者川村文子の教育精神にもとづき、世界の平和に貢献し、併せて会員相互の人格の練磨と親睦を図ること」（総則第2条）とあります。在学中に培った教育精神を社会で実践していくのを助け合う役割が同窓会にあるのだと思います。

大学には、川村英文学(国際英語学科)、鶴史会(史学科)のように卒業生を含む独自の活動を行っている学科もありますが、それらの活動も同窓会と共に歩むという姿勢で貫かれています。最近では、大学一期生が何人も同窓会本部に参画してくれて、我々古い人間が不得手とするデジタル方面のアイディアを補ってくれています。これからの世代は、女性の

職業選択も多様で、結婚してもそのまま働くため、現行のように週2回同窓会に来て活動することは困難となり、オンラインの会議を行っていかなければ成り立ちません。一方、会員相互の情報交換も電子化に取り組むことにより、今まで以上に同窓会が卒業生の「広場」の役割を積極的に果たせる可能性もあります。大学卒業生の参画は、時代に即応した同窓会活動のデジタルリニューアルの強い味方になっています。

本学は短期大学を含め、数多くの資格取得のサポートをしていましたので、同窓会がそうした分野で活躍する先輩方の知見に触れるためのツールになればと思いますし、また女性ならではのハツとするような活動をしている卒業生も多いので、そうした先輩・後輩たちを発掘して、啓発し合えるホットな交流の場に出来ればと思っています。



大学開学35周年を迎えるにあたって

副学長 鵜沼 秀行

昭和63(1988)年4月に本学が開学して、文学部の3学科(英語英文学科、史学科、心理学科)でスタートしました。以来35年、3学部8学科と大学院を合わせ持つ総合大学として現在に至っています。開学当初から本学に奉職してきたものの一人として、大学の歴史の一端をお伝えできれば幸いです。

35年間の歴史の中で現在でも変わらないことは、多くの学生が一貫して見せてくれた学ぶことへの誠実な態度です。これはお世辞でも身最良でもありません。他大学でも20年以上教えていますが、例え偏差値65以上などと言われていても、3分の1の学生は授業にも出て来ず、単位を取ることや試験をうまく切り抜けることばかり気にするのを目にしてきました。同じ科目で同じような試験をすると、平均点は本学の学生の方が高いのはいつものことで、私が関わってきた心理学のように初めて学ぶ講義の内容を理解することが必要な科目では当然のこととも言えるでしょう。

一方で、開学以来、大学の教育研究の一端を見てきた者の一人としては、この間、教育の様子も変わってきたことを実感しています。当初は、それぞれの教員が個人の経験をふまえて講義や演習の工夫をしていたわけですが、次第にそれらの工夫が受け継がれ、改善されて本学独自の仕組みが生まれてきたよ

うに思われます。それぞれの学科にその具体的な例を見ることができますが、心理学では学部と大学院の教育に幾つかの変化がありました。近年では、国家資格が誕生して、その要件である科目や実習が整備される中で、本学独自の教育活動が展開されています。当初は試行錯誤であったことも、常に課題の検討と改善を重ね、その結果、臨床心理士は150名以上が誕生しました。

現在の大学を取り巻く社会的な変化は、大学にも時代の変化への対応を迫っているとも言えます。本学も、川村学園100周年を迎えて、新たな世紀へと発展することを期しています。学生と教職員がともに学び、新たな課題に取り組もうとする雰囲気は、今後も受け継がれていくことでしょう。



大学開学35周年にあたり

生活創造学部長 戸澤 純子

1970年代前半にアメリカ国務省から「採用時の学力試験の成績は同じなのに、人によって外交官としての仕事の成果が異なるのはなぜか」という依頼をアメリカの心理学者マクレランド(David McClelland)が受けました。マクレランドはさまざまな心理学的な検討の結果、従来の試験では仕事や生活における成功を十分には予測できず女性などには不利になることもあると結論しました。このようなことをできるだけ少なくするような変数は何かと追求したのちに、マクレランドが見出した変数がコンピテンシー(competency)です。コンピテンシーは直訳すれば能力ですが、優れた仕事する人に共通する特性を

意味します。図1(マクレランドの共同研究者であるスペンサー夫妻によるもの)のようにコンピテンシーは見える部分と見ない部分から構成されます。マクレランドは知識やスキルのような見える能力より、個人の根源的な特性である自己概念などの見えない能力が優れた仕事に結び付くと考えました。

大学開学35周年にあたっての文章で、心理学の話かと怪しまれた方も多いかと存じます。大学、短期大学において川村学園の一教員として多くの学生に対応してきた私の経験は、このコンピテンシーに当てはめることができます。ただし見えるコンピテンシーではありません。本学の学生の特徴は見えない

コンピテンシーにこそあると思うのです。個人の性格(パーソナリティ特性)や他者への尊敬や共感(態度、価値観)などの見えない能力の優れた学生たちに、私はこれまで実に多く出会ってきました。最近、私の不注意で学生たちに迷惑をかけることがありま



した。その時学生たちは私を責めることはなく、むしろ私の体調や仕事のことを心配までしてくれました。この出来事こそ、川村学園の学生の特徴を示していると思うのです。これが本学の伝統であり、本学の誇るべきものと思うのです。

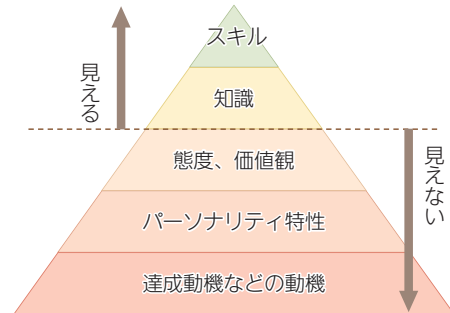


図1 コンピテンシーの概略
(スベンサー&スベンサー(1993/2022)より
一部改変して作成)

大学35周年を迎えるにあたり ～「社会教育学科」の思い出～

生活文化学科学科長 藤原 昌樹

大学設立から3年後、1991(平成3)年に教育学部が情報教育学科、社会教育学科、幼児教育学科の3学科体制で増設されました。筆者は大学設立時には一般教育(現在の共通教育科目)に所属していましたが、1999(平成11)年に社会教育学科に異動しました。社会教育学科とは、ポール・ラングランが提唱した生涯学習の理念のもと、「広範囲にわたる社会教育を総合的に学習、研究、実践し、社会教育の発展・充実・活性化を目指すとともに、社会の高度化・多様化・情報化などの変化に対応できる社会教育指導者の育成と、明るい家庭や社会の創造に役立つ心身ともに健全な女性の育成」(平成3年度『履修案内』より)を目標にした学科です。学科の学生は、地域での活動やボランティア活動に積極的に参加し、学内においても学友会や学園祭などの大学行事の委員を務めるなど、学内のリーダー的な存在であったといえます。

筆者が担当した学科の専門科目のなかで、とりわけ印象に残っているのが「レクリエーション実習」という科目です。この科目は通常の授業に加え、2泊3日の日程で学外実習に出かけます。実習の内容は学生のリクエストをもとに決めることが多く、青少年教育施設を利用しながらキャンプ体験やニュースポーツ・パラスポーツ体験などを実施しました。



2008(平成20)年に実施したシーカヤック、シュノーケリング、砂浜・磯の観察プログラム、自然環境を考える講演で構成した「海の実習」は、神奈川県三浦市の和田長浜海水浴場を中心に、NPO団体のサポートを受けながら実施した最も思い出深い実習になりました。

我が国が目指す生涯学習社会の実現に向け、本学においても生涯学習は全学的に取り組むこととなり、社会教育学科は一定の役割を終えて平成29年度の卒業生をもって25年あまりの歴史に幕を下ろしました。社会教育学科でかかわった先生と学生からの学びは筆者の財産であり、その後の教員としての根幹をなしています。

国際英語学科

国際英語学科では「英語を使う」体験を重ねて実社会で役立つ英語運用能力を培うことを重視し、さまざまな活動を行ってきました。

昨年から国際交流活動が再開し、今年は2月に7名の学生がニュージーランド研修に出発しました。学生たちは2週間の語学研修を経て幼稚園、動物ふれあいパーク、旅行会社など、希望した業種でのインターンシップに取り組みました。

さらに、8月には2名の学生がオックスフォード研修に出発し、ホームステイをしながらの3週間の語学研修に参加しました。研修では自分たちが設定したテーマにもとづいてリサーチやプレゼンテーションを行う「プロジェクトワーク」に参加したり、オックスフォード大学の学生と交流したりと充実した時間を過ごしました。

また、6月に明治神宮、7月に浅草寺で通訳ガイド実習が行われました。昨年は学生が観光客役・ガイド役に分かれて行っていましたが、今年は外国人観光客を相手に行うことができました。学生たちが“Volunteer Guide”と書かれた札を掲げると、様々な国や地域から来られた観光客の方々が興味を示してくださり、コロナ禍を経て世界が再び動き出していることを実感しました。(佐藤 翔馬)



史学科



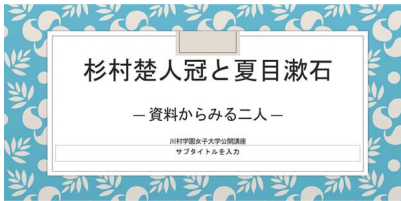
史学科は日本古代史と中世史にそれぞれ新たな専任教員を迎え、新体制となりました。オンライン化が進むなかで学生たちも授業でのアプリ等の使用に慣れ、教材や報告レジュメをデータで共有することも増えているようです。新型コロナウイルスについては未だ予断を許さない状況が続いていますが、行動規制の緩和に伴い学科の特色ある行事の多くが再開されたのはひとまず喜ばしいことでした。歌舞伎、能楽、オペラなどの鑑賞会には多くの学生が参加し、各ゼミでは博物館や美術館の学外見学、夏季休業中のゼミ旅行なども活発に行われました。また、10月7日(土)には4年に1度の鶴史会大会が開催され、東京都立大学の高橋亮介先生をお招きして「皇妃たちのローマ帝国」のタイトルでご講演いただきました。大会後の懇親会には在学生に加えて数名のOGの皆さんが出席され、親睦を深めていました。入学以来なにかと行動制限が多かった2年生以上の学年についても、今後は対面で交流を深める機会を少しずつ増やしていければと思います。(長崎 健吾)

心理学科

心理学科の松岡ゼミでは、0歳クラスから年長クラスまでのかけっこのビデオを用いて、子どもの発達や先生方の働きかけを観察します。観察方法は数量的観察、記述的観察とどちらを選んでも良いとし、自分なりの観察ポイントを決めて観察していきます。人によって観察ポイントが異なり、個性がでますが、それらの観察法は発達心理学の研究者の視点とほぼ同じです。例えば子どもの発達に絞ると、3歳ぐらいまでは自分の名前を呼ばれても返事ができない子たちが居るのに、年長クラスになると全員返事ができるようになるとか、うまく走れない子どもへの先生の働きかけに年齢ごとに変化があり、発達を援助する方法がさまざまであることが観察できます。あるいは平均身長がこんな風に変化していくんだとか、走る時のフォームがどんどん安定していつている事を記述していきます。3年生はこうやって、自分の気に入った観察方法を試みることで卒業論文のテーマが浮かんだり、観察手法を創造したりしています。(簗下 成子)



日本文化学科



今年度の大学主催の公開講座「我孫子の文化と魅力」では日本文化学科から眞田尊光先生(日本美術史)、山名順子先生(日本文学)、伊藤純先生(民俗学)が登壇しました。それぞれの専門的視点から我孫子の文化を取り上げました。参加者からは「地元ではあまり知られていない文化を知ることができた」「我孫子のことをもっと知りたくなった」という声をいただきました。また、地域社会とのつながりを重視する取り組みとして、神奈川県愛甲郡愛川町を調査地とした民俗調査実習を帝京大学と合同で実施しました。4日間にわたって巡見や聞き取り調査を行い、その成果を報告書にまとめました。また、チャット音声アプリやオンライン会議ツールを利用して両校の参加者が合同で事前・事後の連絡を取り合うなど、ポストコロナ時代の教育実践にもなりました。

地域社会に深く関わる領域を専門とする教員を有する日本文化学科らしい実践ができた1年となりました。(伊藤 純)

教育学部

Faculty of Education

TOPICS OF THE YEAR

幼児教育学科

幼児教育学科は直接体験することの楽しさを、教員自らが共有することを心掛けています。今年度はその取り組みを二つ紹介したいと思います。

一つ目は、附属保育園の「保育体験」です。本学は附属保育園が隣接しているため、常に子どもたちを感じながら学ぶことができる環境です。1・2年生共に一日保育体験を夏休みにいき、保育園は「安心・安全な環境」が基本であり、「第二の家庭」「温かい雰囲気」の大切さを学びました。子ども一人ひとりに笑顔で話しかけ、準備してきた児童文化財を子どもたちの前で演じました。学生一人ひとりが「子どもってかわいい」「子どもの発想ってすごい」と、「子どもの世界観」に感動していました。学生たちは学内を散歩する園児たちを発見して、子どもたちが身近な存在となり、子どもと出会う楽しさや保育の魅力を感じています。

二つ目は、「子育てサークルONE + (オネプラス)」の稼働です。附属保育園や子育て支援センターで子どもたちや保護者の方と一緒にふれあったり遊んだりしながら、子ども一人ひとりへのかかわりや、子育て支援の大切さを知ることを目的としています。夏休みには「NPO法人こども環境Museumアフタフ・バーバン」による親子あそびワークショップを開催しました。学生たちと教員が共に人のぬくもりやコミュニケーションを学びあい、感じ、挑戦、発見をしながら研鑽を積んでいます。(山下 佳香)



児童教育学科



「先生になりたい夢」を実現するための学科です。そのために、教育現場で実践的に学ぶ機会を数多く用意しています。ここでは、体験のいくつかを紹介します。

1年生は、6月、基礎ゼミナールにおいて、「我孫子第二小学校」を訪問し、各学年の授業を参観しました。入学して2ヶ月、授業を受ける立場から授業を行う教員の目線で、児童や教室を見るポイントを学びました。

2年生は、年間を通じて、コホミン(湖北地区公民館)での学習支援を行っています。マンツーマンで教えることで、児童を支援するポイントを学んでいます。10月、「我孫子市立湖北台西小学校」を訪問し授業を参観しました。

3年生は、後期に「教育実習」を行っています。今年度は、受け入れ先のほとんどが市内の小学校だったので、精練授業だけでなく途中の様子も伺うことができました。1か月経つと、学生たちは、児童と関わることの醍醐味・楽しさを体験し戻ってきます。「大変だったけれど感動があふれた」と語り、教師への覚悟を口にする学生が多くいました。

他にも、教員採用試験に向けて、日頃から教職教養や専門科目の対策を行い、夏休みには二次試験の対策講座を実施し、個人面接や模擬授業、小論文などで実践力をつけます。個人でノートを作成し協働的に学んでいます。(横山 悦子)

生活文化学科

生活文化学科では地域との連携活動を通じた実践的な学びを積極的に進めています。我孫子市との活動では、毎年11月に開催される「健康フェア」で紹介するレシピの提供をしています。このレシピは我孫子市の食生活や生活習慣の改善や健康づくりにつながるものとして、レシピの考案から調理、写真撮影まで学生中心に進められています。さらに、「地域活性イベント論」では部活動の地域移行を見据えて発足した陸上クラブの継続的な運営に向けて地域の理解を深めるため、学生の企画運営による陸上競技の体験会を7月に開催しました。多くの方に参加いただき、盛況のうちに終えることができました。地域などの課題解決に向けた実践的な学びは、将来の仕事にもつながる経験になることでしょう。家庭科教員採用試験も好調で、東京都や千葉県などで一次試験に臨んだ4年生全員が合格しました。(庄司 武史)



観光文化学科



「現場の本音に触れ、理論の実践を通じて実社会での経験値を高めること」を目標にした授業「観光文化実践」では、各教員がオリジナルの授業を企画しています。そのうちの一つ「観光文化実践Ⅸ」ではPBLをテーマに株式会社サンシャインシティと連携いたしました。受講生は、サンシャインシティが主催する“子供が遊び・学ぶことができる”イベント「サンシャインシティプレーパーク」において“地域の子供たちへ遊びを通じてリサイクルの大切さを伝えよう”をスローガンに学内で回収したペットボトルやキャップ、トイレトペーパーの芯といったリサイクル品を使用して子供たちと一緒にオモチャを作るワークショップを企画運営いたしました。チーム毎の事前学修と準備を経て11/4、5の2日間にわたり多くの子供たちを迎えることができました。受講生は、“持続可能なまちづくり”を目指す地域社会や事業者と関わりながら、企画運営では思い通りにならないことも臨機応変に対応することで、課題解決力、協働力、実践力を身に付ける機会になったことでしょう。(山田 祐子)

大学院

大学院生の心理実習

大学院の深層心理学概論(1)では、様々な芸術療法を学びます。有名なのはコラージュ療法、箱庭療法ですが、幼児でも遊びながらセラピーできるスウィッグル法なども学びます。スウィッグル法は、画用紙に色とりどりのマジックペンでなぐりがきした線を子どもとセラピストで交互にクレヨンで色を付けていき、完成したら、何かに見立てて(クジラ、猫、雷などなんでも)仕上げます。そんな非言語コミュニケーションをして子どもと遊びながら信頼関係を築いていくと、子どもは、辛い胸の内を見せてくれたり、傷ついた心を象徴する絵を描いたりしてくれます。写真は交互スウィッグル法という手法を用い、6分割した画面に5個のスウィッグルで絵を浮かび上がらせ、最後に、出てきたものを全て取り込んだ物語を作っていきます。この物語は子どもの世界をやさしく教えてくれて、セラピーの道しるべになってくれます。大学院生だけで行ったこの授業でも学生達ひとりひとりの輝くような個性が表現されていました。このように芸術療法はその人らしさが生き生きと表現され、表現することで自然と癒しが起こりセラピーが成立します。(簗下 成子)



“グリーン・ノウ”の庭で

文学部 国際英語学科

菱田 信彦



2023年8月26日(土)から9月4日(月)まで、個人研究費の一部を利用してイギリスへ行かせていただいた。『グリーン・ノウの子どもたち』などの児童文学作品によって日本でも知られている作家、ルーシー・M・ボストン(1892-1990)の研究旅行に参加したのである。

人気作家にもかかわらずボストンの研究書はこれまでほとんどなかったが、この度イギリスで*Lucy Boston: An Artist in Everything She Did* (oldknow books, 2021.08)、日本で『ルーシー・ボストン：館の魔法に魅せられた芸術家』(国書刊行会、2022.12)と、相次いでボストンの評伝が出版された。それを記念して、両書の著作者を中心とする日英の研究者によるカンファレンスが開かれることとなった。私はどちらにも寄稿していたので、その席で短い発表をする機会を得た。

ボストンは生前、英国最古の住宅のひとつである石造りの家「ザ・マナー」に暮らしており、その広い庭でバラなどを育てる園芸家としても知られていた。今回のカンファレンスは、義理の娘であるダイアナ・ボストンさんの協力を得てザ・マナーで開かれることになった。訪れてみると庭に(運動会で見えるような)テントが2つも張られ、芝生の上のテーブルにポットやカップ、ビスケットが並んでお茶の用意が整えられていたのに驚いた。イギリス版*Lucy Boston*の編者である児童文学研究者・作家のヴィクター・ワトソン先生、日本のアニメへのイギリス文学・文化の影響を分析しているキャサリン・バトラー先生など、錚々たる研究者と並んで、グリーン・ノウのモデルとなった家の庭でミルクティーをすするのは不思議な体験だった。

お茶の後ダイアナさんにザ・マナーを案内していただき、ボストンの手になるパッチワークを鑑賞したり、愛用のグラモフォンでレコードを聴いたりした。それから庭のテントの下で昼食となり、昨年崩御したエリザベス2世の戴冠式のために考案されたという伝統料理、コロネーションチキンをいただいた。

続いて、大きい方のテントの下で車座に椅子を並べていよいよカンファレンスが始まった。カンファレンスの後のアフタヌーンティー(仕出しだがたいへん豪華だった)に至るまで、すべて庭での開催だった。幸い雨はたまにパラつく程度だったが、夏とはいえ最高気温は23℃ぐらい、風もけっこうあってはっきりいって寒かった。屋外で過ごすことへのイギリス人のこだわり、自宅の庭で手作りの料理や菓子を供することこそ最高のもてなしと考えるようなメンタリティには文学作品等で接してはいたが、「ここまでか」と思った。

カンファレンスでは、1950年代以降に作品を発表したボストンが、じつはヴァージニア・ウルフとほぼ同時代人であること、ボストン作品の語り口にモダニズム文学の影響が顕れている可能性があることなどについて話した。皆さん熱心に耳を傾けて下さり、終わった後でダイアナさんが「そうとは気づかなかった!」と声をかけてくれた。

カンファレンスにサリーさんという女性が同席しておられ、ダイアナさんに「どなたですか?」と聞いたらなんと、『トムは真夜中の庭で』の作者、フィリパ・ピアスのお嬢さんとのことだった。翌日われわれはケンブリッジのサリーさんのお宅を訪ね、『トムは真夜中の庭で』でメルバン邸として描かれている屋敷などを見せていただくことになる(こちらでもお庭でお茶が出た)。



研究対象はすぐそばに

文学部 日本文化学科

伊藤 純



中学校3年生の夏。同級生に誘われて地元のお祭りで奉納される獅子舞に参加した。花笠を頭に載せて獅子舞の周りで立っているだけの簡単な役目。まさに飛び入り参加だった。お祭りが終わったら直会になる。わけもわからないまま直会に参加した。直会ではサンマやサバなどの缶詰と体が痺れるほど塩辛いキュウリとナスの漬物が定番のようだ。その席でどこからともなく「来年は獅子だな!」と声掛けられた。来年も参加することが決まった。獅子舞は地域のなかでも古い家の人達が参加するもので、両親の代からその地域に住み始めた私には無縁なもので、それまで見

たこともなかった。たまたま声を掛けられただけかもしれないが、こうして縁ができたのは何かの運命だったのかもしれない。現在まで夏になると地元の神社で獅子舞を奉納しており、いちおう日本でも数少ない獅子舞専門家として人生を歩んでいる。

もっとも、最初から獅子舞にのめり込んだ訳ではない。獅子舞の習得は基本的に見様見真似で、初めて挑む演目であっても長老級の指導者からの容赦のないかつ理不尽な指導もある。よく若者同士で「昨日と言ってること違うね?」などと愚痴るほどに細かい所作が定まっていない。何か大切なことが書かれていそうな巻物があるが「見ると目が潰れる」と見ることはできない。衣装や獅子頭はお祭り当日しか身に着けないため、一人で着られるようになるには数年かかる。幕で覆われたなかで踊るため息ができなく、そもそも身体的苦痛が伴う踊りだ。衣装にも限りがあるので、場合によってはすでに誰かが袖を通した汗まみれの衣装を着ることもある。当然、不快。

私にとって獅子舞はそんな程度のものであったが、進学した大学で民俗学に出会い認識が一変した。大学には民俗学の先生が一人しかいなかったが、その先生は葬送・墓制の専門家だった。葬式やお墓が研究対象になる。ならば獅子舞も…。こうして民俗学はどのような事象も学術的な対象にしてしまう節操のない学問だということを知った。実際に獅子舞について調べてみると、日本における獅子舞はじつに多様だった。その名称や獅子頭の造形、幕の模様や素材、幕のなかに入る人数、獅子の動かし方、音楽、そして獅子舞に込められた人びとの願いも一様ではない。また、現地調査では獅子舞を大切にしている人にたくさん出会うことができた。知れば知るほど自身が行う獅子舞も貴重なもののように思えてきた。私が経験してきた直会の料理や指導法・巻物・衣装・身体的苦痛に関するエピソードは、個別的な経験でありながらも伝承組織論や学習論・芸能史・芸能論などと接続し、私の研究の出発点になっていた。

民俗学は身近な事象を扱うがゆえに、こうした生活経験と研究動機とが結びつきやすい学問だと思う。ただし、何事も対象として認識しなければ始まらないという厄介さもある。だからこそ、学生には日々流れゆく身近な事象を意識的に認識し、探究できる能力を身に付けて社会に出てほしいと思っている。そして、その教育を提供するのに四苦八苦しながら大学教員生活を楽しく送っている。



関白流獅子舞 (栃木県日光市小林)



新関ささら (秋田県湯上市昭和)

子育てを科学する

教育学部 幼児教育学科
白石 優子



私は、2016年頃から6年間ほど、理化学研究所脳神経科学研究センターで、子ども虐待に関する研究プロジェクトに参加していました。そこで、重度虐待事件で受刑中の養育者の調査を担当し、虐待に至った背景などを分析していました。親たちの多くは子ども時代に逆境の体験(被虐待体験や親の離婚、死別など)があり、子育て当時にはDVや貧困などストレスの高い孤立した生活をしていることがわかりました。「どうすれば虐待を防げたと思うか」という問いに対して、何人もの人が「子育てを学ぶ機会がほしかった」と答えたことが印象的でした。

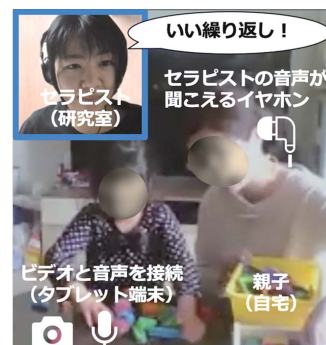
いわゆる先進国の多くには、虐待をしてしまった親たちに、子どもとのかかわりを学ぶ機会を提供する仕組みがあります。お隣の韓国もそのひとつで、児童虐待事犯に対する教育を義務的に実施できる基盤が作られてきました。虐待を受けた子どもが望んでいることも、親が刑務所に入れられ罰せられることではなく、親の行動が変わり、安全に共に暮らせることではないでしょうか。しかし、日本では児童相談所の介入ケースでさえ、親への治療や教育に関するプログラムの提供は5%以下という報告もあり、普及に課題があるのが現状です。

虐待の再発防止や子どもの問題行動の減少に高い効果を示している心理療法のひとつにPCIT(親子相互交流療法)があります。わたしは、上記の調査と並行して、子育てに何らかのお困りのある一般家庭を対象にPCITを提供する研究も行ってきました。コロナ禍を機会に、PCITはリモート版が普及し、私自身もリモートでセラピーを行うようになりました。リモートの場合、親子は家庭でセラピーを受

療することができます。親が困っているのは家庭での子どもの行動であることが多いので、その“リアル”な状況を共有できる強みがあります。

私は、PCITの実践のなかで親たちが「子どもがかわいくなった」と話すのを何度も耳にしました。それには、子どもの行動や関係性の変化などいくつかの要因が思い当たりますが、子どもに対するポジティブな感情の上昇そのものはより確かなものに思えました。現在進めている研究では、父親を対象にPCITの短縮版を実施し、質問紙調査や機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を使って子どもに対する感情の変化を調べています。

そもそも、子育てをする種である哺乳類の親にとって、子どもという刺激は「報酬」であると考えられます。バーを押すと仔が出てくる装置を使ったラットの実験で、出産後の母ラットは最大684回バーを押したと報告されています。人の子育てはもっと複雑ですが、子どもという存在への愛おしさや世話をしたいという欲求が子育てを支えていると考えられます。もともとそのような感情があっても、親自身の抱えるストレスや子育て環境によっては、その感情が維持できるとは限りません。ときに、子どもの存在を疎ましく思うことや子育てを苦痛に感じることもあるでしょう。しかし、人は自分の感情を調整し、適切な行動(サポートを求めることを含む)を選択することも可能です。事実、虐待を受けて育った人であっても、その多くは虐待をせずに子どもを育てています(「虐待の連鎖」という言葉がありますが、虐待を繰り返さない人の方が多数です)。本来その人が持っていた力を取り戻せるような回復のアプローチの普及とその科学的エビデンスの蓄積に貢献できればと、日々奮闘しています。



リモート版PCITの様子

新任教員紹介

文学部

史学科
長崎 健吾 講師

室町時代から戦国時代にかけての京都の都市社会に住んでいた人々に関心をもち、研究を続けています。ずいぶん昔のことにも思えるかもしれませんが、都市という場所の特徴には時代を超えた共通点も少なくありません。例えば、周辺地域から多くの人々を引き寄せ空間であったこと、流動的な環境において多様な属性をもつ人々がともに生活していたこと、そうしたなかで村のような閉鎖的な共同体とは異なる新たな共同性が育まれていたことなどが挙げられるでしょう。そしてこうした都市の特質の多くには、大学という場所にも通じるところがあるのではないのでしょうか。大学という場所でも様々な友人たちや教職員との出会いを通じて学んでいく川村の学生の皆さんを、微力ながらサポートしていきたいと思っています。

文学部

史学科
堀部 猛 教授

史学科に着任いたしました堀部猛と申します。学芸員課程と日本史などを担当しています。専門は日本古代史で、律令国家とよばれる体制が形成される7世紀から、10世紀頃までをおもに対象としています。テーマは二つあり、一つは生産や技術といった側面から古代国家の支配構造を捉えること、もう一つは東国を中心とした地域史研究です。後者は、長く地域博物館の学芸員として働いてきたなかで培ってきたテーマです。考古学・民俗学・美術史など専門を異にする先輩・同僚と日々仕事をするなかで、現地を歩くことの大切さを教えられる、多様な資料からその地域の歴史・文化を考える方法を学んできました。博物館の現場で経験し、学んできたことを学生の皆さんに伝えていきたいと思っています。

文学部

心理学科
平間 さゆり 助教

心理学科の平間さゆりです。クリニックでカウンセリングや心理検査、復職支援プログラムの実施、また、高校のスクールカウンセラー、精神鑑定時の心理検査などを仕事としておりました。これら医療・教育・司法の臨床経験を活かして、学生の皆さんに心理職の実情や心理職に必要な知識をどのように伝えるか、日々模索しながら授業を行っています。現在、学部も大学院も「公認心理師」の実習に関わる授業が多いため、学生の皆さんと色々な実習現場に行きます。どの実習先でも、熱意のある実習指導者の方々に支えられ、学生は心理職についての学びを深めています。私も教員として、実習を受けたことが、学生のためになるよう願ひながら、心理支援の大切さが伝わる授業を工夫していきたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

文学部

日本文化学科
咲本 英恵 講師

日本文化学科に着任いたしました、咲本英恵と申します。本学では、「古典文学史」「古典文学講義」「王朝の文化と文学」などを担当しています。幼いころ手塚治虫の『ブタ』にはまって以来、漫画を読むのが大好きです。専門は日本古典文学で、平安時代から中世に作られた王朝物語、とくに『源氏物語』の仏教的救済を描いた『雲隠六帖』―『源氏物語』のいわゆる二次創作―を研究しています。日本古典文学の登場人物たちは、現代とは異なる社会制度や発想のもと、さまざまな願ひや悩みを抱えて生きています。彼らをとくおして多様な価値観に触れること。そのことが、私たちの選択肢を広げ、人生を豊かにしてくれます。古典を読む意味とは、そんなところにあるのではないかと思います。

教育学部

幼児教育学科
関本 仁 准教授

これまで主たる研究として、社会教育史、特に講義録(現在の通信教育)についての歴史研究をおこなってきました。勉学への希望を捨てず、勤労学生として夜間部や各種校外教育活動に参加していた人たちがそれぞれが地域の中心でどのように学んでいたのか、独学で主体的に学ぶ人たちの学びに対する考え方や、周辺地域の中で、同じような志をもつ人々とのつながりを強く求めていた人々の思いを掘り起こす研究をおこなっています。幼児教育に関する思想や歴史を様々な視点から紹介・解説し、これまで取り組んでいた生涯学習の考え方や方法を活用することで、関わっていく学生一人ひとりが理論に基づいた教育観・保育観の形成と、より良いキャリア形成ができるよう、その支援者として密に関わっていききたいと考えています。

教育学部

幼児教育学科
北村 真理 講師

幼児教育学科に着任致しました北村真理と申します。専門は、保育領域の表現と絵本です。「幼児指導法総論」や「保育内容の理解と方法(児童文化)」「児童文化」「保育・教職実践演習」「教育実習演習」などの科目を担当しております。幼保連携型認定こども園・小学校・中学校にて得られたこれまでの現場経験を活かし、よりよい授業の在り方を追求して参ります。「人生に無駄なし」という言葉がありますが、大学時代の学びや経験は、学生の皆さんの知識や知恵の源となり、自信に繋がっていくと信じています。本専攻での教育理念を基に学生の皆さんが物事に対する自分の問いを大事に探究しながら、自信を持って幅広く活躍できるよう支えて参りたいと思っています。

生活創造学部

生活文化学科
松本 梓 講師

生活文化学科に着任しました松本梓と申します。基礎栄養学や、調理実習などの、栄養士養成に関する講義を担当しています。着任前は、妊娠女性を対象として血液中の脂質成分の分析を行い、出生児との関係性について研究を行っていました。私たちの体は、日々の食事から摂取した栄養素によって作られます。基礎栄養学の講義では、学生に食事として摂取した栄養素がどの様に血液中に取り込まれ、吸収されるのかを、分かりやすくイメージしやすい様に伝える努力をしています。忙しかったり、疲れていたりと、つい食事が疎かになりやすいです。しかし、栄養士として多くの人の食に関わる学生には、ぜひ自分自身の体と食事から摂取した栄養素の関係性について、少しでも興味を持ってもらえたらと考えております。

生活創造学部

生活文化学科
朴 善美 講師

これまで韓国の病院で一般治療食、特別治療食の献立作成、食材発注など給食経営全般の業務を担当し、日本では国立病院の臨床研究センターの管理栄養士として勤務していました。日韓両国の臨床現場での実務経験を基に「臨床栄養学」「臨床栄養実習」「栄養指導論」などの科目を担当しております。専門分野は小児食物アレルギーの栄養食事指導です。長期間に渡る偏った食生活を送ると生活習慣病の発症リスクが高まるということが知られています。このように食事は人の健康を左右します。食事が疾患発症の原因にもなりうることで、栄養バランスの取れた食事の重要性について症例を挙げながら学生たちに伝えていきたいと思っています。皆さんにとつて最も輝く大学生活を一緒に楽しく過ごしましょう！

生活創造学部

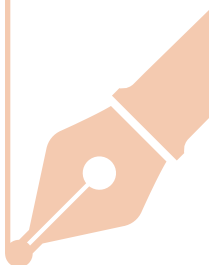
生活文化学科
庄司 武史 准教授

私が研究している清水幾太郎という社会学者は、社会学の講義の初回を「私たちはどこから来て、どこへ向かうのでしょうか?」という問いかけから始めたといっています。分野が細分化した現代社会学はこうした意識を欠かきがちですが、社会学の本領は今の社会や生活をベストな状態、最良な状態と簡単に決めつけないところにあります。だから私たちは常に考えなければなりません。より気持のよい社会や生活に私たちがどのような向かえばよいのかを。そういう社会学の楽しさや難しさを考え、伝えたいと思います。私は人物研究が得意ですが、それとあわせてWeb2.0に川村文子の項目がないことに気づきました。最近、『紫雲』『二ころ』等を参考に項目を新しく立ててみたので一緒に母校創立者の情報を更新・充実させていきたいと思います。

生活創造学部

観光文化学科
櫻井 正 准教授

「なぜ、観光を学ぶのか」の問いを18年間の企業セクターでの実務経験を経て、17年目になる教育セクターにおいて、知覚動考(こもかくこう)としております。申し遅れました、観光文化学科に着任致しました、櫻井正と申します。どうぞ宜しくお願い致します。東京都生まれですが、運輸系の旅行会社出身のためか、現代風に言うとノマド的なワークライフスタイルをとって参りました。本学との関わりは、かつて中学生時代から我孫子市(天竺台駅)に住んでいました。(当時の北口はほとんど家もなく、線路でヘビを目撃したこともあり)その折に、ZINの進出に続いて「川村学園女子大学がやってくる」との空気があったのを記憶しています。





できた！うれしい！
子どものうた
—3つのポイント
で上手くなる

幼児教育学科 教授
古山 律子 著
出版社：東洋館出版社
発行年：2023年 3月



0～6歳児
「創造性を
豊かにする」
保育

幼児教育学科 教授
古山 律子 著
出版社：カワイ出版
発行年：2023年 4月



杉孫七郎
関係文書

史学科 教授
西川 誠 編
出版社：同成社
発行年：2023年 2月



式亭三馬の
言語描写
—三馬蔵書印書を
手掛かりに—

日本文化学科 教授
長崎 靖子 編
出版社：武蔵野書院
発行年：2024年 2月

2023年度 退職教員

【退職】 本学を退職する教員をご紹介します。
皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

小泉 朝子	国際英語学科 教授
柴田 万里子	史学科 講師
森島 遼	心理学科 講師
今井 正司	心理学科 教授
長崎 靖子	日本文化学科 教授
岩崎 利彦	日本文化学科 教授
古山 律子	幼児教育学科 教授
松井 浩	観光文化学科 教授

2023年度 大学行事

2023年度の公開講座は10月に全3解6講座行われました。地元である「我孫子の文化と魅力」がテーマのためたくさんの方が参加され、講座後活発な質疑応答がありました。



我孫子市教育委員会 稲村隆先生の講演の様子

心理相談センターの活動



当センターは今年で設立20年を迎えました。近年は土曜日の開室やオンライン面接の導入など、時代にあわせた変化を取り入れてきました。親子並行面接とは別に、幼児を同伴される方も増えており、ご家族の相談中に院生が同室でお子さんを見守る体制など、子育て世代に配慮した取り組みも行っております。7月23日の公開講座「なぜ青少年はスマホを手放さないのか？～心の成長を支える心理学～」では「自分らしさ」について相談員の秋田貴与子先生、スマホ依存に関して佐藤哲康先生に分かりやすく解説して頂きました。実習施設としては、大学院生一人一人丁寧に教育しており、「臨床の川村」と呼ばれる誇りがあります。今後も地域に開かれたこころの相談室として尽力していきたいと思ひます。

花時計 vol. **45** 2024年3月1日 発行日

【発行】 川村学園女子大学 【編集】 広報委員会

〒270-1138 千葉県我孫子市下ヶ戸1133番地
TEL 04-7183-0111 (代表)
ホームページ <https://www.kgwu.ac.jp/>

■目白キャンパス

〒171-0031 東京都豊島区目白3丁目1番19号
TEL 03-3951-0111 (代表)

大学ホームページ

